
沈黙の盲点

伊藤 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙の盲点

【Nコード】

N6769V

【作者名】

伊藤 薫

【あらすじ】

事故として処理されたある子どもの墜落死。その背後に隠された保険金殺人。残されたのは、別件で逮捕した物言わぬ参考人のみ。はたして、48時間の拘留期限の間に「落とせる」のか。真壁仁、上野南署刑事時代の記憶。

1 (前書き)

登場人物紹介

真壁仁・・・巡査。上野南署刑事一課強行犯担当。

富樫誠幸・・・東都日報社会部警視庁担当。

岡島進・・・法医学者。東亜医科大学准教授。

小野寺茂夫・・・警部。上野南署刑事二課知能犯担当。

円谷実昭・・・警部。上野南署刑事課課長代理。

7月11日、午前11時47分。

上野南署、取調室。

真壁仁はタバコを吸いながら、目の前に座る中年の男を観察していた。

どうも、気に食わねえ。

直感がそう告げている。

白瀬淳平は、朝から一言も話そうとしなかった。イスにななめに腰かけ、顔を右の肩に乗せたまま、ぴくりともしない。眼鏡をかけた平凡な顔からは、何を考えているのか表情が読み取れない。

鉄格子を嵌めた窓から、蝉の鳴き声が遠く聞こえる。パイプイスと鉄製の机しかない取調室は湿気と熱気がこもり、真壁の苛立ちを増幅させた。

事の発端は、1月7日の午後3時ごろに寄せられた119番の通報だった。

10階建てマンションの脇にあるツツジの茂みに突っ込むようにして、子どもが倒れている。

救急車が到着した頃には子どもに意識は無く、搬送先の病院で死亡が確認された。

遺体の身元は、現場のマンションの7階に住む柏木裕也。まだ小学3年生で、翌日に始業式を控えていた。

駆けつけた上野南署の捜査陣は当初、これを「事故」と判断した。

現場から約20メートル離れた民家の庭先から、凧が発見され、父親が息子のものと証言した。ベランダの柵は高さが約1メートルあったが、その手前に約20センチの踏み台が置かれていた。

裕也の身長は、約133センチ。現場の状況から推測して、裕也は踏み台の上に立ってベランダから凧揚げをしていた。そこに強風

が吹きつけ、風にあおられた風引に引つ張られるようにして、約20メートル下の地面に墜落した。だが……。

不審者がいた。

午後2時ごろ、マンションの7階の廊下に、青いジャンパーを着た男が立っていた。近くを通りかかった人は男が水道のメーターをのぞいていたので、「水道局から来た」と思ったという。風が発見された民家の近くの通りでも、午後2時半ごろ、同じ服装を着た男が近所の主婦に目撃されていた。

父親にも影があった。

柏木達三は親から継いだ自動車工場を経営していたが、工場は従業員にまかせつきりで、自身はギャンブル三昧の生活を送っていた。本人はプロの予想師を気取っていたが、次第に大きく負け越すようになって、消費者金融にも借金をするようになった。

ところが、息子が死んで間もない頃になって、柏木はその負債をすべて現金で清算している。

息子に掛けられた多額の保険金。

真壁はタバコを灰皿に押しつぶして、白瀬に迫った。

「もう一度、聞く。去年の12月10日、あなたは北千住の駅前にある『鈴蘭』で飲んでいたな？」

朝からずつと言いつづけている問だった。

「……」

「女将の証言によると、あなたはその日の6時ごろ、ひとりで店に入り、カウンターの一番奥の席に座って飲んでいた」

「……」

「そして、6時半ごろ、男が2人はいつていきた。どっちも工員風で、『柏木自動車工場』と縫い付けてあった青いジャンパーを着ていた。覚えていないのか？」

「……」

「そこで、あなたは聞いたはずだ。男が相手にこう持ちかけた。『

オレの……』」

その瞬間、取調室のドアが開いた。

真壁が背後を振り向くと、制服警官が立っていた。地下の留置場の看守を務める若い男だった。真壁が「何の用だ」と睨むと、警官のそばから白髪頭が覗いた。

「真壁、時間だ」

円谷実昭、上野南署の刑事課課長代理を務めている。

真壁は腕時計に眼を落とした。

12時を回っていた。

白瀬は看守と連れだって、取調室を出て行った。部屋を出て行く瞬間、真壁は白瀬の表情が緩むのを見逃さなかった。

「落ちたか？」

頭から、円谷の声が落ちてきた。

真壁は座したまま、黙ってタバコを取り出し、火を付けた。

「うん・・・そうか、まああと少しだ」

真壁は円谷を殴ってやりたい衝動に駆られた。円谷こそ、1月7日の現場に臨場し、「事故」の判断を下した張本人だった。

こいつは、白瀬に賞賛を送ってやがる。

真壁は内心、そう吐き捨てた。

「あせらずゆっくりとな」

円谷はそう言って、真壁の肩をたたき、廊下へ消えた。

真壁は奥歯をぎりりと噛んだ。タバコの苦味が口いっぱいに広がった。円谷の白々しさに怒りを覚えつつ、自分のふがいなさを呪った。

白瀬は留置場へ向かう間、昨日の理不尽な朝のことを思い返していた。二の腕にはまだ、刑事の腕の感触が痺れとして、はつきりと残っていた。

7月10日、午前7時30分。

平凡な朝だった。普段どおり、リビングで家族と一緒に朝食を食べっていると、白瀬は娘の愛美がいつも以上に笑っていることに気付いた。

明日の遊園地を楽しみにしているんだな。

そう思うと、白瀬はほのぼのとした気持ちに包まれた。しかし・

誰かが家のドアを叩いている。

トイレに行っていた妻が、不安げにそう言った。

玄関に出ると、たしかにドアが叩かれていた。白瀬は少なからず警戒し、そっと内鍵を外した。すると、荒っぽくドアが外側に引かれ、熱気が忍び込んできた。チェーンが突っ張り、そのわずかな隙間から茶色の背広の腕が差し込まれ、金文字の光る手帳を、白瀬の鼻先に突きつけた。

「警察です、白瀬淳平さんですね」

ドアの隙間を、精悍な2つの顔が埋めていた。

「そうですけど、なにか・・・？」

「少しお聞きしたことがあるので、署までご同行ねがいます」

「聞くって何を？」白瀬はおどけた。「なにも悪いことはしていませんよ」

そう言つて、ドアのチェーンを外した。

癖毛の中年と、腕つぶしの強そうな若い刑事が玄関に入って来た。口を開いたのは、癖毛の中年だった。

「われわれは上野南署のものなんですけど・・・私は小野寺、こつち

は須藤」

若い刑事が頭を下げた。

「それで、何の用です？」

「白瀬さん、あんた・・・会社の同僚から10万ほど借金をしていで、まだ返済していないみたいですねえ？」

白瀬は顔が引きつるのを感じた。

「少し返すのが遅れているだけですよ・・・」

「詐欺罪成立です」

「えっ？」

白瀬は耳を疑った。

「あなたを逮捕します」

背中にはりつくようにして聞いていた妻の体が震えだした。その妻の脚には、小学生の愛美がすっかりとしがみついていた。

「あなた・・・」

呆然としている白瀬の手首に手錠がかけられた。へたへたと床に座り込んでしまった妻に、白瀬は振り絞るような声を出した。

「大丈夫、すぐ戻ってくる」

玄関を出た途端、腕をぐいっと引かれた。

「イタツ！な、なにするんだ・・・」

「ホラ、さっさと行くぞ」

須藤が太い腕を絡ませてきて、家の前の小さい階段を転がるように下った。

通りには、黒のセダンが待機していた。もがきつつ、白瀬は軋むほど体を振り返らせて、家の玄関に眼をやった。血の気を失った妻が立っていた。

くそう、なんだってこんな・・・。

白瀬の頭は混乱していた。

上野南署、取調室。

小野寺が諭すような調子で言った。

「さっきも言った通り、あんたは借金を長いこと返済していない。

これは立派な詐欺罪に当たるんですよ」

白瀬は抗弁した。

「た、確かに返済しなかったことは悪いと思っっています……ですが、詐欺罪だなんてどう考えても大げさじゃないですか」

「こっちはね、証言取っただよ。あんたがちつとも金を返してくれないってな！」

須藤がすごんだ。

白瀬は、体がぶるりと震えるのを感じた。

「悪いことは言いませんよ、正直に全部話したほうがいいですよ。時間はたっぷりとありますから」

そう言っつて、小野寺は笑みを浮かべた。だが、その眼は笑っていなかった。

明日はもう遊園地に連れて行けない。

そんな思いとともに、白瀬は娘の笑っている顔が脳裏によぎった。

7月10日、午後9時。

白瀬は疲労困憊の体で、留置場のかび臭い壁に寄り掛かっていた。天気予報では、今夜は熱帯夜だと言っていたのに、留置場の中は不思議と冷えていた。

取調べは執拗だった。似たようなことを2回、3回と繰り返し質問され、言わされた。時間が経過していく内に、少しずつ「自分はほんとうに詐欺をしたんだ」という心境に陥るような感覚を持った。疲れでぼうっとしていた白瀬の耳に、小野寺が追い討ちをかけた。「さて、今日の分はこれで終わり。明日までは留置場でお待ちください」

白瀬はうつむいていた顔を上げた。

「これで終わりじゃないんですか・・・？」

「あなたの証言のウラを取らなきゃならないし、なにより明日からあなたは有給休暇を取っていらっしやる。実に好都合でしたなあ」

さも当たり前だといった口調で、小野寺は笑った。

留置場までは、須藤が付き添った。

「明日は娘を遊園地に連れていかなきゃならないんです。借りたお金は今ここでかえしてもいいですから、出してくれませんか」

白瀬は繰り返し訴えた。

「あきらめな」

そう言って、須藤は白瀬を看守にまかせ、廊下の奥に消えた。

妻と娘はどうしているだろう。やっぱり泣いているんだろうか。そう思うと、食事も満足に食べられなかった。せめて連絡だけほしいと、白瀬は鉄格子に顔を寄せて、看守に声をかけた。だが、いくら呼んでも、看守は一向に姿を現さない。

白瀬の心に、絶望がこみあげてきた。

しばらくして、靴音が響いた。

冷たい響きが静まり返った廊下をこつちに向かつてきている。そして、鉄格子の前に止まった。白瀬は顔を上げた。

若い男が立っていた。背が高く、初めて見る顔だった。後から看守がやって来て、鉄格子の鍵を開けた。また取調べだと思つと、白瀬は暗澹とした気分になった。

取調室に入ると、若い男は「真壁だ」と名乗ったきり、タバコを吸い続けていた。ぴりぴりとした空気を背負い、白瀬に冷めた視線を投げていた。

白瀬は不安になった。

「あの、刑事さん……？」

真壁はタバコを灰皿に押し潰し、パイプイスの背もたれにかけた上着から一枚の写真を取り出すと、机の上に滑らせた。

「あなた……この子ども、知ってるだろ？」

色黒の大柄な男と、その横に野球のユニフォームを着た子どもが写っていた。

「柏木裕也。今年の1月7日、パレス南上野っていうマンションで殺されたんだよ」

「知っていたら、何だつて言うんです？」

「あなた、その日、会社を休んでいるだろ？」

「ちよつと、待つてください……」

白瀬は背筋が冷えるのを感じた。

「わ、私は今……殺人の容疑がかけられているんですか？」

真壁は机に手をつけて、身を乗り出した。

「あなたの家の窓から、そのマンションが見えるはずだ」

「だ、だからと言って……」

「滞りがちだった、家のローンの返済、どうやってまとめて払った！？」

白瀬は思わず視線を外した。

「ほお、都合の悪いことは黙秘かあ！」

真壁は拳で机をたたいた。

「いいか、よく聞け！」

白瀬は胸倉を掴まれ、イスから腰が浮き上がった。

「あんたはあの日、青いジャンパーを着て水道局の人間を装った。家の鍵は、裕也の親父からもらった。その鍵で部屋に入ったあんたは、裕也をベランダから外に放り投げた！」

白瀬は恐怖から目を閉じた。

「事故に見せかけるため、あんたは凧を持って部屋を出た。その凧を近くの民家の庭先に捨てて逃げたんだろ！」

白瀬は思わず叫んだ。

「し、知らない！私は何もやってない！」

「やめるんだ！」

そのとき、ドアが開いて、一喝が響いた。青い制服の腕が伸びて、真壁は白瀬から引き離された。留置場の看守に取り押さえられた真壁のそばから、白髪頭の男が姿を現した。

白髪頭は、真壁に向かって言った。

「そこまでだ、真壁。もう夜の10時も近い。これ以上の取調は、ペナルティがつくぞ」

真壁はにらみ返した。

「オレはペナルティなんざ、怖くないですよ」

そう言って、看守に「放せ」と低い声で告げた。看守の腕を振り払うと、真壁は上着を肩にかけた。最後に、白瀬に鋭い一瞥を投げ、部屋を出て行った。

白髪頭が、白瀬に向いた。

「白瀬さん、大丈夫ですか？私はこの刑事課長代理を務める円谷という者です」

そう言って、円谷は笑った。

留置場までの間、円谷は白瀬に付き添い、穏やかな口調で話した。「いいかい、白瀬さん。自供というのは、自らの意志で話した時のみ証拠となりえる。もし、あなたが本当に潔白だったら、何も話さないほうがいいんだ」

ようやく生きて心地がした白瀬は、円谷に訴えた。

「どうしても、家に帰りたいんです。妻と娘が心配で……」

「残念ながら、それは出来ない」

白瀬は落胆した。

「弁護士を呼ぶといい。そうすれば、家族と連絡が取れるはずだから」

そう言って、円谷は鉄格子の前で別れた。

留置場の壁によりかかった白瀬は、気持ちがいぶ落ち着いていた。

明日の朝一番で、弁護士を呼ばなきゃ……。だが、あいにくと白瀬には知り合いの弁護士がない。

どうしようかと思案していると、ズボンのポケットに小さな紙片が入っていることに気付いた。開くと、ある弁護士事務所の名前と電話番号が書かれていた。

白瀬の脳裏に、円谷の穏やかな顔が浮かんだ。心が救われた思いとともに、眼に涙がこみあげてきた。

7月11日、午前12時8分。

真壁は取調室をでると、トイレに向かって廊下を歩いた。

円谷の野郎、いつ気付いたんだ？

真壁は腹立ち紛れに、考えをめぐらせた。

昨日の朝、真壁は小野寺の取調が終わるのをいつか、いつかと同じじりして待っていた。

半年に渡る捜査の末、真壁はようやく事件の重要参考人として白瀬を浮上させたわけだが、はっきりとした物的証拠がある訳では無かった。

拘留期限は48時間。それだけに、「対決」の時間は一時間でも長く欲しかった。

ところが、午前10時になって、強盗事件の発生が署に伝達された。都内でも随一の大きさを誇る上野南署は、殺人・強盗を担当する刑事一課の強行犯捜査班を2つ抱えている。ローテーションの順番からして今回は一班が担当するはずだったが、真壁が所属する二班に事件が回された。

真壁は釈然としない思いを抱えたまま、現場へ向かわざるを得なかった。表面上は課長命令だったが、課長代理を務める円谷の意向が含まれていることは明白だった。

円谷には来春、警視庁への異動が内定していた。その警察人生のほとんどを所轄回りですごしてきた円谷にとって、キャリアの最後を警視庁で終われるのは冥利に尽きるという思いがこみ上げてきたであろう。

1月7日の現場に臨場した理由もそこにある。

自分で花道を作った・・・。

真壁の脳裏に、ある顔が浮かんだ。

山本隆弘。警視庁捜査一課から異動してきた刑事で、今は上野南

署強行犯捜査一班の班長を務めている。

そして、1月7日の現場に円谷と一緒に臨場し、円谷の独断を鵜呑みにした「共犯」。

真壁はそう思った。

円谷には、白瀬を詐欺容疑で引っ張るとしか告げていない。しかも、詐欺を担当する刑事二課にいる真壁の同期、須藤守の口から。

山本の口から吹き込まれたか……。

真壁は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

1月7日の事件の報告書には円谷の独断で、はなから事故だと思いついて捜査した痕跡があった。そのため、指紋の採取や周囲の聞き込み、さらには検視官の臨場要請も行っていない。

ところが、あれは殺人事件だった。

昨日の朝、山本から話を聞いた円谷の脳裏には、ある不安がよぎったはずだ。

もし自分のミスが露見されれば、警視庁への異動が白紙されるかもしれない。

だからこそ、円谷は手を打った。

昨夜の10時でのやりとり。そして、数分前のやり取り。すべては「被疑者の人権侵害」という建前で、十分な取調を封じている。

だが、疑問が残る。

白瀬は昨夜と打って変わって、沈黙を押し通している。その態度にはむしろ、傲慢ささえ感じさせた。

真壁には、それが気に食わなかった。

トイレは、右側に個室が並び、窓に面した左側に便器が並んでいた。真壁が入ると、癖毛の男が窓際の便器の前に立っていた。真壁に気づくと、癖毛はニヤリと笑った。

「よう、真壁ちゃん。だいぶ苦戦しているみたいだな」

小野寺茂夫。刑事二課にいるベテラン刑事で、昨日の朝、自宅にいた白瀬を詐欺容疑の「別件逮捕」で引っ張ってきた。

真壁は小野寺の隣の便器の前に立った。

「面通しは？」

朝の取調の間に、1月7日、現場となったマンションの7階で青いジャンパーを着た男を見た数名の男女と、凧が捨てられていた民家の近くで同じ服装の男を見かけた主婦に、白瀬の顔をマジックミラー越しに確認させていた。

「まるつきりダメだね」

小野寺は水を流して、ズボンのチャックを上げた。

「そうそう、面白いことがわかったよ」

「何スか？」

「ホシについた鈴木ってゆう弁護士。あれ、代理の甥っ子」

真壁の脳裏に今朝、留置場の前ですれ違った、くたびれた背広を着た神経質そうな男が浮かんだ。

弁護士の声は、円谷の声。何もしゃべるな。そうすれば、また家族に会えるとしても、吹き込んだのだろうか。どちらにしろ、白瀬は絶対に口を割らない。

そう思うと、真壁は舌打ちした。

小野寺は続けた。

「それと、ホシは10日前に会社をリストラされてる。家族には、今日から出張だって言っていたんだろ？」

真壁はそれには答えず、水を流した。手洗いの蛇口をひねって、ぬるい水で手と顔を流した。小野寺は鏡を見ながら、癖毛を櫛でといていた。

「昨日連行したとき、白瀬はどんな様子でした？」

「うーん、普通だったね。でも、まてよ・・・」

真壁は小野寺に眼を向けた。

「現場のマンションの前を通ったとき、一瞬だったが、顔を背けた」
真壁は拳で洗面台を叩いた。

心証としては十分じゃないか。

小野寺はドアを開け、出て行くかと思うと、口を開いた。

「覚悟しておいた方がいいよ、真壁ちゃん。経験から言っと、ああ

いうホシが一番手ごわい。証拠があるとか、ないとかじゃないんだ。おそろく一生かかっても吐くまい」

そう言っつて、小野寺はトイレを出て行つた。

それじゃあ、どんなに真つ黒なヤツでも真つ白になつちまつじやねえか。

真壁は心の内にそう吐き捨て、奥歯をぎりりと深く噛んだ。

午前12時11分。

署の裏口から出ると、真壁は合羽橋の商店街に向かって歩き出した。すると、急に背後から車のクラクションを鳴らされた。真壁が振り向くと、ピンクのビートルが近づいて停まった。

ウィンドウが下がって、大学生の頃から見慣れた顔が言った。

「お前ってヤツは、1キロ先からでも刑事だって丸分かりだぞ」

富樫誠幸。

全国紙の東都日報に勤める記者で、最初は北海道の支局に配属された。そこで、道警本部の不祥事に関する特ダネを掴んで、一躍有名になった。真壁が上野南署刑事課に配属された頃、東京本社の子会社部に呼び戻され、今では警視庁捜査1課の「番記者」を務めていた。2人は明真大学の同窓生でもあった。

「乗れよ、一緒にメシ喰おう」

そう言って、富樫は助手席のドアを開けた。

真壁は上体を入れ、次に脚を入れようとすると、あまりに車が小さく、膝を胸の前で抱えなければならなかった。

「なんで、こんな小さい車に乗ってんだ？」

「僕の子猫ちゃんのものさ」

「子猫ちゃん？奥さんのこと、そう呼んでいるのか？」

真壁は嘲るような口調で言った。

「どう呼ぼうが、僕の勝手だろう」

富樫は口を尖らせると、アクセルを踏んだ。

2人が入ったのは、合羽橋の路地裏にある「かつ新」という小さなトンカツ屋だった。窓際のテーブルで、値段は安いが、けっこうボリュームのある定食をどうにか食べ終え、富樫がお茶をすすっていると、真壁はタバコの箱を振って一本くわえた。

「おまえは？」

「ああ、おれはもう禁煙したんだ。子どもができたのが、きつかけになっただんだ」

「えらいな」

そう言っつて、真壁は上着からマッチ箱を取り出したが、開けてみると中はカラだった。

「ありや・・・おい、火、持ってるか？」

「僕が持つてるはずがないだろ」

そう言いつつ、茶色のジャケットを探ると、富樫の手は胸に固い感触を得た。取り出してみると、油がほとんど切れかかっている使い捨てライターだった。

「これでガマンしろ」

「サンキュー」

真壁はタバコに火を付け、紫煙をくゆらせた。体質が変わったのか、富樫はタバコの煙に少し咳き込み、真壁は「悪いな」と言っつて、右手の窓を開けた。

富樫はライターをいじりながら、呟いた。

「そう言えば、昨日、テレビでやっていたな」

「何が？」

真壁は灰皿にタバコをたいた。

「使い捨てライターの火を付ける部分、5000ボルトくらいあるんだってさ」

「ふうん」

富樫はライターをテーブルの上に置いた。

「なあ、山、やってるか？」

「だいぶ行っつてないな、ザイルがもう腐っているだろ」

そう言っつて、真壁は富樫の手をびしゃりとたたいた。

「お前こそ、なんだこの手は？ほとんど真っ白じゃないか」

大学生の頃、2人は山岳部に入っていた。体をいじめるように休みが取れば、必ずどこかの山に登っていた。そのおかげで2人も真っ黒に日焼けし、夜遅くまで大学に残っていると、守衛から泥

棒と勘違いされたことが間々あった。

「だったら・・・正月に穂高に行かないか？」

「穂高のどこよ？」

「前穂の屏風やって、北穂の滝谷に出る・・・」

「バカ、そんなんでできるかよ」

真壁はタバコを灰皿に押し潰した。

「もう体力が落ちてるから、槍ヶ岳から北穂だって息が上がるぞ」
「だったら、屏風だけでもやりたいな」

真壁は2本目のタバコを口にしながら、富樫の言葉を意外に思った。

大学3年の正月、真壁と富樫は前穂高岳の屏風岩に登っていた。アンザイレンして、トップは真壁だった。富樫が真壁に続いて小さなオーバーバンクを越えようとしたとき、足元の岩が崩れたのである。滑落して30メートルほど落ちたが、命に別状はなかった。だが、かなりの恐怖を味わったらしく、富樫はそれ以来ひと言も屏風岩のことを口にしなかった。

真壁はタバコに火をつけた。

「分かった。前穂の屏風だな？」

「ああ・・・だから、12月も休み取つとけよ。南アルプスで脚を慣らそう」

真壁は頷きながら、こうした口約束を繰り返してはまた破ることになるんだらうなどと、胸の奥で思った。それは富樫も同じはずだ。
「ところで、もうひとつの山の方は？」

そう言いつつ、富樫はジャケットからいそいそとメモ帳とペンを取り出した。

「おまえ、警視庁担当だろ？」

「けっこう動きがないんだよ。所轄の落ち穂でも特ダネになるかもしれないだろ」

真壁はため息をひとつ吐くと、タバコを灰皿に押し潰した。

「父親による殺人教唆。それに保険金がからんでいる」

真壁は事件の概要を話し始めた。富樫はときどき質問をはさみながら、メモ帳にペンを走らせた。

「父親の柏木達三に頼まれて、白瀬が実行したと……裕也君にはどのくらいの保険金がかかっていたんだ？」

「たしか8千くらいだ。2人で山分けしたんだらうよ。」

真壁は苛立たしげに呟いた。

「で、柏木は借金の帳消し……白瀬は家のローンの返済に使ったと。そういえば、白瀬は任意で引っ張ったんだよな？」

真壁はうなずいた。

「親父は？ 柏木達三は逮捕しなかったのか？」

「死んだよ。」

「えっ？」

「心臓発作で亡くなってる。」

「心臓発作って……」

「柏木の親父は身長が183センチで、体重は120キロを超えてた。それで心臓に大きく負担が掛かっていたらしく、狭心症の既往歴もあつたんだ。」

「いつ死んだんだ？」

「今年の2月15日。工場で倒れているのを新聞の配達員が見た。」

前日の夜中は、ほとんど零下に近い気温だったから、それが発作の引き金になった。」

「やけに詳しいじゃないか？」

「近くの交番にクソ真面目な駐在がいるんだよ。変死だつて騒ぎ立てて、署に通報したんだ。それで、オレの班が臨場した。」

「なるほど。となると……残されたのは、物言わぬ参考人のみか。」

真壁はため息をつくと、脳裏に白瀬の暗い顔が浮かんだ。

「それで、どうなんだ？ 落ちそうなのか？」

真壁は黙つたまま、3本目のタバコを口にくわえ、テーブルの上に置かれた使い捨てライターを手を取った。

その時だった。

真壁の脳裏を、焼け付くような焦燥が襲った。岩壁をよじ登っているときにも感じる、眼の奥がじりじりと焼けるような焦燥。脳みその中が燃え、血液が沸騰するような、あの感覚。

真壁は思わず額に手をやった。

「おい、大丈夫か？」

富樫が顔をのぞきこんだ。

「なあ・・・ひとつ、頼まれてくれないか？」

どうにか、真壁はそれだけを口にした。

午後1時7分。

真壁は店の前で、富樫と別れた。ピンクのビートルが走り去ると、真壁は照りつける太陽に顔をしかめ、ネクタイを少し緩めると、歩き出した。署に戻るまでの間、真壁はこれまでの捜査に思いを馳せた。

2月15日、午前7時37分。

真壁はコートを体に巻きつけ、足踏みをした。白い息を吐きながら、青いビニールシートで覆われた先を睨んだ。

今年の冬は例年なく厳しかった。寒気が依然として勢力を保ち、連日ひと桁下の気温が続いていた。前日の夜は気温がついに零下に達していた。故郷の新潟や山岳部で冬山の経験があるとはいえ、真壁にとつても今年の冬は寒かった。

隣では、班長の小平が手に息を当て、忌々しげに呟いた。

「検視官のヤツ、なにをねばってやがるんだ」

松が谷南交番から通報があったのは、午前5時半のことだった。新聞の配達員が、配達先で人が倒れているのを発見したという。場所は、柏木自動車工場。上野南署の宿直から、強行犯捜査二班に要請が伝えられた。

松が谷南の駐在は、ある意味で有名だった。勤続35年のベテランだったが、真面目で堅物な性格が災いして、ささいなことをやらと署に事件として報告した。つい先日も老人の孤独死を変死だと通報して、周りから迷惑がられていた。

今回もそんな類いのことだろうと、現場に臨場した誰もがそう思っていた。

シートから音がすると、ようやく検視官が出てきた。昨夜、深酒していたらしく酒臭い息を吐きながら、通報から1時間以上も経って現われた。そして、検視にも1時間。真壁たちは、寒空の下、2

時間も待ちぼうけをくらっていた。

小平が皮肉っぽく言った。

「ホトケはどうでしたか？本庁の検視官どの」

検視官は、にべもなく答えた。

「心臓発作による自然死だ。事件性はない」

ほら、見たことか。

周りにそんな空気が漂った。真壁は班員に続いて、工場の中に入った。修理中だったのか、ボンネットが開いたままの乗用車が一台置かれていた。その脇には工具箱があつたが、よく観察すると、どの器具も埃をかぶっていた。

その奥にカバーが掛かったままの車が一台あり、壁に面してスチール製の机が2つ置かれていた。机の上は帳簿や何かの書類で散らかつており、回転イスが飛び出していた。

駐在が言った。

「遺体の氏名は、柏木達三。年齢は38歳、この工場の経営者です。机のそばに、胸を手で押さえたまま仰向けで倒れていました」

遺体は、ビニールシートの上に寝ていた。検視で服は脱がされていた。眼は見開き、開いた口から舌が歯並びより前に出ている。

(こりゃあ、トドだな・・・)

真壁は心のどこかでそう思った。色黒の肌に、相撲取りのような大きな体。心臓にかなりの負担をかけていたんだろう。発作を起したというのも、うなずける話だった。

遺体を見た小平が検視官に向かって言った。

「かなり大きな男ですねえ」

「身長は・・・」

検視官が助手に眼を向けた。

「183センチ。体重は量ってみなければ分かりませんが、所見でも100キロは超えているでしょう」

検視官が遺体のそばにしゃがむと、ペンライトを眼に当てた。

「顔面はわずかながら蒼白。両の瞼と眼球には、多数の溢血点。心

臓疾患による急死の典型的な所見だ」

真壁が言った。

「死亡推定時刻は？」

助手が答えた。

「昨夜の10時前後です」

「イスに座っていたとき、突然の発作に見舞われたんだろう。昨日の夜は、とても寒かったからな」

検視官が締めくくった。

工場を出ると、見物人が集まっていた。駆けつけた救急車にカバーを掛けた担架が載せられると、人混みの中から、すつと男が出てきて、左の路地に消えた。

真壁はその男を見逃さなかった。男が消えた路地に入り、その後姿をどうにか捉えた。服装は、茶色のブルゾンにネズミ色のズボン。頭は丸坊主だった。

捜査員が欠伸ばじりに署に帰ろうとすると、小平は真壁を呼び止めた。

「社会勉強だ。ホトケの家、いくぞ」

「どうしてですか？」

「万が一ってことがあるだろうが。万全を期すんだよ」

柏木の家は、パレス南上野というマンションにあった。

2月15日、午前8時13分。

マンションは、工場から眺めることができた。低い家が立ち並ぶこの地域では、10階建てのパレス南上野は否応にも目立った。

柏木の部屋は、7階にあった。管理人がドアの鍵を開けると、玄関は靴が散乱していた。廊下は、コンビニのレジ袋で包んだゴミや洗っていないと思われる衣服で覆われ、足の踏み場が無かった。

「汚ねえ部屋だ」

小平が顔をしかめた。

リビングに入ると、今度は異臭が鼻をついた。台所は汚れた食器やカップ麺の容器で埋まり、テーブルの上は弁当の残飯がそのまま放置されていた。

ハンカチで鼻を覆いながら、小平と真壁は2LDKの部屋をすべて調べた。寝室のタンスから、薬局から処方された紙袋が出てきた。中には3種類の錠剤と説明書が入っており、どれも狭心症の薬だった。

真壁はタンスの上に眼を向けた。埃をかぶった写真立てが倒されていた。手に取ってみると、色黒の大柄な男・柏木達三と、その横に野球のユニフォームを着た子どもの写真が入っていた。

真壁は写真を取り出し、管理人に見せた。

「この子どもは？」

「たしか・・・裕也くんでしたかねえ。亡くなったんですよ、正月に」

「いつですか？」

「1月の7日ですよ」

その日、真壁は新潟に帰省していた。知っているはずもなかった。「どうして亡くなったんですか？」

「事故ですよ。ベランダから凧揚げをしていて・・・強い風に凧が

あおられて、それに引つ張られるようにして墜ちたんですよ」

真壁はベランダに出た。一畳ぐらいの広さで、鉄柵の前に踏み台が置かれていた。

「凧揚げをしていたんですか？」

管理人は、真壁の足元にある踏み台を指した。

「その台の上に乗っかって、していたんですよ」

真壁はベランダから、約20メートル下の地面をのぞいた。真下は芝生が広がり、少し離れた先に木が植えられ、茂みがその下を覆っていた。

「どうした、真壁。行くぞ」

小平に呼びかけられ、真壁の思考は途絶えた。

ベランダから出ようとしたとき、真壁の眼がある男を捉えた。

茶色のブルゾンに、丸坊主の頭。

マンシヨンの前で小平と別れると、真壁は急いで路地を回った。

ベランダから見えた道路に出ると、男はまだいた。どこか落ち着かない様子だった。

「おい！そこのお前、ちょっと・・・」

真壁が呼びかけた瞬間、男は駆け出し、左の路地を回った。

「あつ、コラ！待て！」

真壁は急いで角を回ると、男の姿が数十メートル先の角を右に消えた。

身を切るような北風が顔に当たる。寒さでかたまった体を動かし、男を絶対に逃すまいと、懸命に追いつがった。

この周辺は昔の田んぼ道をそのまま舗装したらしく、細い道が縦横無尽に入り交じって迷路のようになっていた。

追いかけている内に、真壁は男がここの土地勘を持っていないことに気付いた。次第に角で立ち止まることが多くなり、ただ場当たり的に曲がっていた。その度に向こうのペースが遅くなるにつれ、真壁はがぜん脚を動かしたが、息が追いつかなくなってきた。

くそ・・・今度こそ、タバコ止めてやる・・・！

真壁が胸の内にそう毒つくくと、男に異変が起こった。

肩が大きく揺れ、足元がふらつき、ついに脚を止めた。そして、家のブロック塀に寄り掛かり、地面に崩れ落ちた。

真壁はそばに駆け寄った。

男は顔じゅうに玉のような汗を光らせ、せいぜいと喘いでいた。

真壁は声を掛けようとしたが、荒い息が出るばかりで、乾燥した空気で喉が焼けるように痛かった。

ようやく息が整うと、真壁は男の胸倉を掴んだ。

「おい！ ついさつき、工場のそばにいたな！ 一体どういうわけだ？」

「・・・か、金だよ。金が欲しかったんだ」

「金！？ 金ってなんのことだ！」

「は、話すから・・・手をどけてくれ！ 息が苦しい！」

しばらく経って、男は高田清二と名乗り、塗装工で柏木のギャンブル仲間だという。高田は地べたに座ったまま、話し始めた。

「俺は柏木に金を貸していたんだ。なんでも賭け麻雀やら、競馬やら・・・とにかくあいつは負け越していたんだ」

「柏木の借金はどのくらいだったんだ？」

「知らないよ。でも、聞いたところによると、800万くらいあったらしい」

「それで？」

「柏木が最近、金を持ってるって聞いたんだ。借りたヤツに金を返して・・・でも、俺はまだ返してもらっていなかった」

「だから、今朝、工場に顔を出したんだな」

高田はうなずいた。

「マンションの近くにいたのは？」

「俺はあいつに50万近く貸していたんだ。最近では生活が厳しくなつて・・・どうしても返して欲しかった」

「柏木が心臓病を患っていたことは？」

「聞いてはいたよ」

「もういい、帰っていいぞ」

高田は立ち上がり、尻を叩いて埃を払った。真壁はちょっと歩くと、ある事を思い出して、高田に振り向いた。

「柏木の子どもについて、何か知らないか？」

「子ども・・・噂だけど、柏木が最近、金を持ってるのは子どもを殺したからだって」

真壁は眼を見開いた。

「何だって？」

「昔、居酒屋で柏木が酔った調子に言ったんだ。『最近、ガキが消えた女房にそっくりでムシヤクシヤする。殺してやりてえ』って・・・」

真壁は厳しい表情を浮かべ、その場に立ち尽くした。

8 (前書き)

少しお話を長くしました。

去年の夏のことだった。

真壁は殺人事件の捜査に駆り出され、容疑者が潜伏していると思われる家の張り込みをしていた。昼になって交替をしたが、次の見張りまで3時間ぐらいしかなかった。真壁は署に戻って溜まっていた書類を片付けようと思った。

小学校のグラウンドに差し掛かると、子ども達の黄色い声が聞こえてきた。少年の野球チームが練習していた。

真壁は懐かしさにとらわれて、思わず立ち止まった。真壁の野球の始まりも、やはり少年野球だった。その後、高校まで続けていたが、右肩を悪くして大学に入ると止めてしまっていた。

カキンと音がすると、真壁は顔を上げた。大きな当たりだった。逆光に顔をしかめながら、ボールの行方を追い、真壁は数歩うしろに下がった。すると、憶測どおり、右手の中にボールがすとんと収まった。

「ありがとうございます！」

背番号10のユニフォームを着た子どもが駆け寄ってきた。

真壁は少し肩に力を入れて、ボールを放った。思いのほかスピードが出て、真壁は後悔したが、その子どもは胸にグローブを当てて速いボールを受け取った。

真壁は思わず感心し、その子の名前を聞いた。

「裕也です、柏木裕也」

そう言っつて、裕也はチームに戻っていった。

2月16日。

上野南署の2階、刑事課の部屋で真壁は強行犯捜査一班の班長を務める山本隆弘の机の前に立った。

「少し話がしたいんですが」

山本は読んでいた新聞を折りたたむと、真壁の後に続いて、隣の

会議室に入った。

「一体どんな捜査したんですか？」

真壁は1月7日の捜査報告書を、山本に突きつけた。

高田の証言を信じたわけではなかったが、真壁は顔を知った者の死に立ち会えなかったことを悔やんだ。パレス南上野は上野南署の管内にあったから、1月7日は強行犯捜査一班が現場に臨場していた。その報告書を読んで、真壁は愕然とした。

「初めから、事故だと踏んで捜査していますね。誰の判断なんですか？」

山本はしぶしぶ答えた。

「円谷課長代理だ」

「課長代理が？」

真壁は意外に思った。円谷は、現場に出ないことでむしろ有名になっていた。

「でも、あれはどう見たって事故の現場じゃないか」

「現場に検視官を呼んだんですか？」

山本は眼を逸らした。

「事件性の有無は、検視の判断によってなされるはずですよ」

「課長代理が死体を見る。円谷さんは警部だから、法的には何の問題もない」

真壁はため息をついた。山本とは、本質が違う。彼はサラリーマンであって、デカでは無かった。

「もし、これが事故に偽装した殺人だったとしたら？」

山本はそつげなく答えた。

「そんなことは考えたことも無いよ」

その日の午後、真壁は千駄木の東亜医科大学の前に立っていた。眼の前にある病院を眺めて、真壁は思わず呟いた。

「なんだ、こりゃ・・・ボロいにも程があるだろ・・・」

その昔は白亜だったであろう外壁は長年の汚れで薄黒くくすんでいた。真壁は故郷の母校を思い出した。その高校は県内で一番と言

えるほど古くて汚かった。

院内の廊下は昼間でも暗く、壁に貼られたタイルもところどころ剥がれ、汚れたガラスの容器がダンボールに山積みになされて、置かれていた。

真壁は苦心しながら狭い廊下を進み、ようやく目的のドアの前に着いた。ドアには、白文字で書かれた黒い木のプレートが貼られていた。

法医学研究室、岡島進。

「失礼します」

そう言つて、部屋に入ると、真壁はぎよつとした。

部屋は狭く、眼の前に置かれたテーブルには何やら得体の知れない物がホルマリン漬けにされた瓶がたくさん置かれていた。人の気配が感じられなかった。

「岡島先生？」

すると、テーブルの奥から白衣を着た小柄な男が姿を現した。

「君は？新しい研究生かな？」

「上野南署の真壁といます。電話でお話したはずですか・・・」

「あ、ああ。そうだったね、准教授の岡島です」

岡島は柏木裕也を解剖した法医学者だった。上野南署とその近辺の署の変死体の解剖を担当していたが、刑事一課の同僚に言わせると、「かなりの変人」という評判だった。

真壁はおそろおそろ聞いた。

「何を、していらしたんですか・・・？」

「ああ、部屋の整理をちよつとね。今度、違う大学に赴任することになってね。ちよつと手伝ってもらえないかな？」

真壁は顔が引きつるのを感じた。

真壁と岡島は大学での整理を終えた後、パレス南上野に向かった。強行犯捜査一班の報告書によれば、マンションから落下した柏木裕也が発見されたのは、1月7日の午後3時だった。

真壁は隣に立つ管理人に言った。

「遺体はどのへんにあつたんですか？」

「そのツツジの茂みに倒れていたんですよ」

岡島はメジャーを片手に持ち、建物からマンションの敷地と道路を区切るツツジの植え込みまでの距離をはかっていた。

「それは頭から？それとも、背中から？」

「頭からですよ。ちょうど・・・水泳の飛込みをやるような感じですよ」

真壁は足元の芝生を指した。

「その際、芝生に何か痕跡はありましたか？少し乱れていたとか？」

「いや、そんなことは・・・無かつたと思います」

岡島が戻ってきた。

「マンションから茂みまで、約4メートルあつたよ」

真壁が言った。

「直接の死因は？」

「頸椎の骨折と脳挫傷が認められた。その同時損傷で絶命したんだ。そのほかに、肌が露出していた部分に無数の擦過傷があつたけど、ツツジの茂みに突っ込んだ時にできたんだろう」

「事故か他殺か、どう判断しますか？」

「うん・・・たしか、強風にあおられた風引つ張られるようにしてベランダから落ちたんですよね？」

管理人はうなずいた。

「ええ、その風が近くの民家の庭先に落ちていたんですよ」

岡島は腕を組んで少し悩んでいたが、さっと答えを出した。

「これは、他殺だね」

真壁は眼を見開いた。

「どうしてですか？」

「報告書の状況だと、おそらく裕也君は真下に落ちるはずだ。だから、芝生に落ちたときの跡が残るはず。でも、それは無い。遺体は約4メートル先の茂みに落ちていた。すると、横向きの加速度が必要になるんだよね」

「横向きの加速度？」

岡島は真壁のそばに立ち、右手でその胸をぐっと押しした。

「要するに、押しだす力だ。犯人はベランダから裕也君を外に投げたんだ」

その後、真壁はマンションの7階一帯で聞き込みを行った。図らずも、「他殺」の可能性を示す証言はあつと言つ間に出てきた。

午後2時ごろ、青いジャンパーを着た男が立っていた。中肉中背で、眼鏡を掛けていたという。目撃者は口をそろえた。

「水道のメーターをのぞいていたので、水道局から来たと思った」
風が発見された民家の近くの通りでも、午後2時半ごろ、同じ風采をした男を近所の主婦が目撃していた。

犯人は、眼鏡を掛けた中肉中背の男。それに、青いジャンパー。
真壁はついに「頂上」を捉えた。

3月2日、午後2時。

曆の上では3月になったが、依然として寒い日が続いていた。北風が強く吹き寄せ、真壁は少し体を震わせると、コートの際を立てた。町屋から隅田川に向かって歩き、ある解体工場を目指していた。岡島医師によって柏木裕也の他殺が決定的になると、真壁は塗装工の高田と会い、柏木達三がギャンブル仲間からどのくらいの借金をしていたかを聞き出した。その結果、柏木は消費者金融からの借金を含めると、約900万近い負債を抱え、金を借りた人数の総勢は30名に上った。

真壁は柏木に金を貸した人間に当たり、柏木が「子どもが死んだ頃から、羽振りが良くなり、借金を返して来た」ことやその負債のほとんどを清算したことを突き止めた。そして、真壁はいま柏木の工場で最後に働いていた元従業員に会おうとしていた。

青いトタン堀に、看板が付けられていた。その先には、シャーシだけになった廃車がまるでブロックみたいに積まれていた。プレス機が大きな騒音を立てていたので、真壁は耳を手で抑えて近くにいた男に声を張り上げた。

「小松寿和っていう従業員は！？小松だ！」

男は鉄くずの山の向こうを指した。

男が指した先は、倉庫になっていた。青いジャンパーを着た男が倉庫の中で、廃車のエンジンを解体していた。中に入ると、不思議と騒音が気にならなくなった。

「あんたが小松っていうのか？」

男が振り向いた。中肉中背で、眼鏡を掛けていた。青いジャンパーの下は、灰色のつなぎを着ていた。

「そうですか、何か？」

真壁は興奮を抑えて、手帳を見せた。

「上野南署の真壁だ。柏木達三について聞きたいことがある」

「柏木がどうしたっていうんですか」

小松の声は少し震えていた。

「柏木にどれくらい金を貸していた？」

「だいぶ貸しましたよ。未払い分の給料を含めて……30万ぐらいでしょうかね」

「未払い？」

「この不況ですし……なにしろ、あの人は仕事してなかったんですから」

そう言いながら、小松は工具でエンジンをいじっていた。真壁の脳裏に、柏木の工場が浮かんだ。工具はどれも埃をかぶっていた。

「どういうことだ？ 柏木は工場の経営者だったんだろ？」

小松は苦笑を浮かべた。

「経営者だなんて……柏木はあの工場を親から引き継いだだけですよ。自分はギャンブル三昧で、仕事はほとんど僕にまかっせきりでした」

「柏木が最近、借金を返していたのは知っているか？」

「ええ、子どもが事故で亡くなったんで……その保険金で、ですよ」

「違う。殺されたんだ」

「えっ？」

振り向いた小松の顔がこわばった。

「事故に見せかけた殺人だった。あの日は無風の快晴だった。なのに、裕也君は凧を上げていた。おかしいと思わないか？」

真壁はゆっくりと小松に詰め寄った。

「1月7日の午後2時ごろ、どこで何をしていた？」

「えっ、ちょ、ちよつと待ってください……」

「いいから、答える！」

小松はうろたえながらも、言葉を搾り出した。

「あの日は……後楽園の馬券売り場にいました。柏木と丸坊主の

高田も一緒でした」

「何だつて？」

真壁は体から力が抜けるのを感じた。小松は続けた。

「たしか、午後の3時半を過ぎたころでした。柏木の携帯が鳴って・
・話し終わると、慌てて売り場を出て行っただんですよ。後で聞いたら、子どもが事故に遭ったって」

真壁は注意深く小松の表情を観察していたが、何ら変わったところは見られなかった。

「柏木は子どもを殺したいって言っていたのは？」

「それはしよつちゆう言っていましたよ。僕が工場を辞める時にも」

「いつのことだ？」

「去年の12月ですよ。送別会だったことで、北千住で飲んでいましたが・・・酔っていたとは思いますが、その席でも言っていました。もつとも女将には怒られましたけども」

「北千住のどこだ？」

「『鈴蘭』つてところです」

真壁はそれを手帳に書き留めると、小松がぶつぶつと言った。

「柏木の子どもは事故じゃなかったんですか？」

「殺しの線が強い。そうだ・・・柏木は金をどうやって管理しているんだ？」

保険会社に問い合わせたところ、柏木裕也に掛けられていた保険金は約8000万円。柏木が抱えていた負債から差し引いても、約7000万は残るはず。真壁は柏木の部屋に入って銀行の預金通帳や貸金庫の有無を調べたが、保険金の所在は未だ分からなかった。

小松の答えに、真壁は驚いた。

「工場じゃないですか？」

「工場？」

「冷蔵庫ですよ。柏木は工場の売り上げを冷蔵庫に入れて保管していたんですよ。『ここなら、泥棒にもバレないだろ』って、柏木が得意そうに言っていたのを覚えています」

その日の夜、真壁は柏木の工場にいた。冷蔵庫は、柏木が倒れていた机のそばに立っていた。扉を開けると、ひんやりとした冷気の代わりに、ゴキブリが飛び出してきた。中をあらかた浚うと、ビールの空き缶やら腐ったコンビニの惣菜しか出てこなかった。

真壁の脳裏に、小松の顔が醜く結ばれた。

10 (前書き)

だいぶ、お待たせしました。

3月13日、午後7時。

真壁は北千住の駅前に近い、居酒屋や小料理屋がひしめきあう狭い通りを歩いてきた。

どこかの店から聞こえてくる笑い声。辺りにただよう焼き物のこぼばしい香りと酒の甘い匂い。薄暗い通りに赤提灯や看板の光がほのかに照っていた。

「鈴蘭」という小料理屋は、すぐに見つかった。間口の狭い白木の格子戸に、アクリルの白い看板が外に立っていた。

真壁は長身を屈めるように暖簾をくぐった。右手にカウンターがあつて、その奥が調理場となっている。細い通路の先に、襖で仕切られた小さな個室がある。

カウンターの一番奥の席で、サラリーマン風の男が一人で酒を飲んでいた。客はそれだけだった。真壁はコートを脱ぐと、カウンターの中ほどの席に座った。

「いらつしゃいませ。お飲み物、なんにしますか？」

カウンターの中から、和服を着た小柄な女性が声を掛けた。

「ビールを」

女将はおしぼりと箸休めを真壁の前に置くと、ガスコンロの上の鍋を注意しながらビールの栓を抜き、グラスに注いだ。

真壁は、自分が緊張していることに気付いた。北千住の界隈で、柏木達三の行きつけが「鈴蘭」しかないことは、小松と高田から聞いて把握していた。頂上へのアプローチはここしかない。そんな思いが、真壁の心の内にただよっていた。

しばらくして、サラリーマン風の男が会計を済ませて店を出ると、真壁は口を開いた。

「去年の12月、柏木達三って男が来たんだが、知らないか？」

「なに、お兄さんは警察なの？」

「ああ、そうだが・・・」

女将は冷めた声でぴしゃりと言った。

「ここはそんな無粋な事を聞くところじゃありません」

真壁は横っ面を叩かれたような感覚になり、面食らって押し黙った。ところが、女将は空になったグラスを見るなり、明るい声を出した。

「お兄さんの出身はどこなの？」

真壁はしぶしぶと答えた。

「新潟だ」

「だったら、これが一番よ」

女将はカウンターの下から、日本酒が入った一升瓶を取り出した。「萬寿杯」と書かれたラベルが貼られていた。

翌朝、真壁は「鈴蘭」の話をすると、小平から「よくあの店に入れたな」と、感心された。訳を聞くと、数年前に千住中央署の捜査四課の捜査員があのお店で暴力団相手に乱闘騒ぎを起こしたという。それ以来、女将は警官嫌いになったらしい。

「それより、お前は最近、成績がよくない。どうにかしろ」

小平は渋い顔で言った。言われるまでも無く、真壁には分かっていた。

ここ数日、真壁は柏木の工場周辺を聞き込みに戻っていた。消えた約7000万の保険金の行方である。松が谷南交番にも手伝ってもらってはいたが、大した成果は挙げられずにいた。

終わりの見えない捜査に、真壁は自問自答を繰り返した。

（ひとつの事件にこだわっていて何の利益があるのか。社会の正義のため？そんな青臭いこと言っていていられる歳か）

その最中、松が谷小学校に聞き込みに戻ったところ、ある先生がついに真壁が望んでいた証言をしてくれた。

「2月16日でしたかな・・・自販機でタバコを買いに行ったときですよ。男の人がね、工場の脇から出てきたんですよ」

「人数はひとり？」

先生はうなずいた。

「服装とか、顔とか、背格好とかはどうです？」

「この辺は外灯が少ないですからね。よく見えませんでした」

「何時ごろ、その男を見ました？」

「夜の11時ぐらいでした」

真壁はその足で、町屋の工場に出向き、小松を問いただした。

「2月16日の午後11時ごろ、どこで何をやっていた？」

小松の顔がすこし青ざめた。

「え、えくと・・・ちよつと、あの・・・」

真壁は苛立った。

「何だ？」

「女房には、言わないでおいてくださいよ」

「分かったから、何だ？」

小松は消え入るような声で言った。

「・・・風俗です」

真壁はこの時になってはじめて、刑事という職業が因果なものであることを味わった。

真壁は根気強く、「鈴蘭」に通った。

女将には、事件の状況をすべて話した。「もうここしかないんだ」と、泣きをばやいたこともあったが、女将の口は思っていたよりも固かった。

「アタシはね、どんなお客さんでも売るようなマネはしたくないの。例のごとく、女将はぴしゃりと言い、真壁のお猪口に日本酒を注いだ。」

「鈴蘭」の雰囲気は家庭的で、朗らかだった。女将は他の客の話には応えたり、かいがいしく世話をしていたが、真壁に対しては冷たくあしらった。

真壁は意地になつて、がぜん粘った。しかし、呑み慣れていないのか、女将の出す日本酒は回りやすく、店内で寝てしまうこともしばしばあった。かなり酔った状態で、口もろくに回らない、ふわふわした感覚の中で、真壁は女将がこうなることを仕組んだんじゃないかと、訝しく思った。

その日から、真壁は晩酌を必ず「鈴蘭」で、閉店時間まで過ごすことにした。

翌朝、真壁は同僚から「酒臭いぞ」と注意された。いくらかでも口臭をごまかそうとガムを噛んでいると、真壁の机にある男が近づいた。

鑑識の長谷だった。

「真壁さんに言われて工場の冷蔵庫を調べたところ、3種類の指紋が検出されました。2つは柏木と小松のもので間違いないです」

手渡された報告書には、不鮮明ながら親指と人差し指の指紋が写っていた。

「3つの指紋は、すべてドアの取っ手に付着していました」

「識別は可能ですか？」

けど、ついには折れて話したってわけ」

真壁はようやく口を開いた。

「柏木が来ていたことを認めるんだな？」

「ええ、去年の12月よね。たしか、16日だったわ。柏木さんは若い従業員と一緒に来て、送別会だって言ってた」

「2人は何時ごろ来たんだ？」

「6時半ごろ」

「柏木は子どもを殺すと言ったんだな？」

「あのね、刑事さん。お酒が入ると、誰だって気が大きくなってな
んでも口に出すのよ」

女将はため息をついた。真壁は食い下がった。

「柏木は子どもを殺すとか、物騒な話をしていたんだな？」
女将は頷いた。

「その時、他に客はいなかったのか？」

「・・・いたわ」

真壁は黙っていたが、酔いも吹き飛ぶような気持ちだった。

「今日も来てたの。カウンターの一番奥に座っていた人よ」

真壁はシヨックを受けた。はじめて「鈴蘭」に来た日も見かけていたあの男。

「白瀬さん。たしか、白瀬淳平って言っていたわ」

11 (後書き)

長らくお待たせしましたが、次回から最終部となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769v/>

沈黙の盲点

2011年11月13日03時22分発行